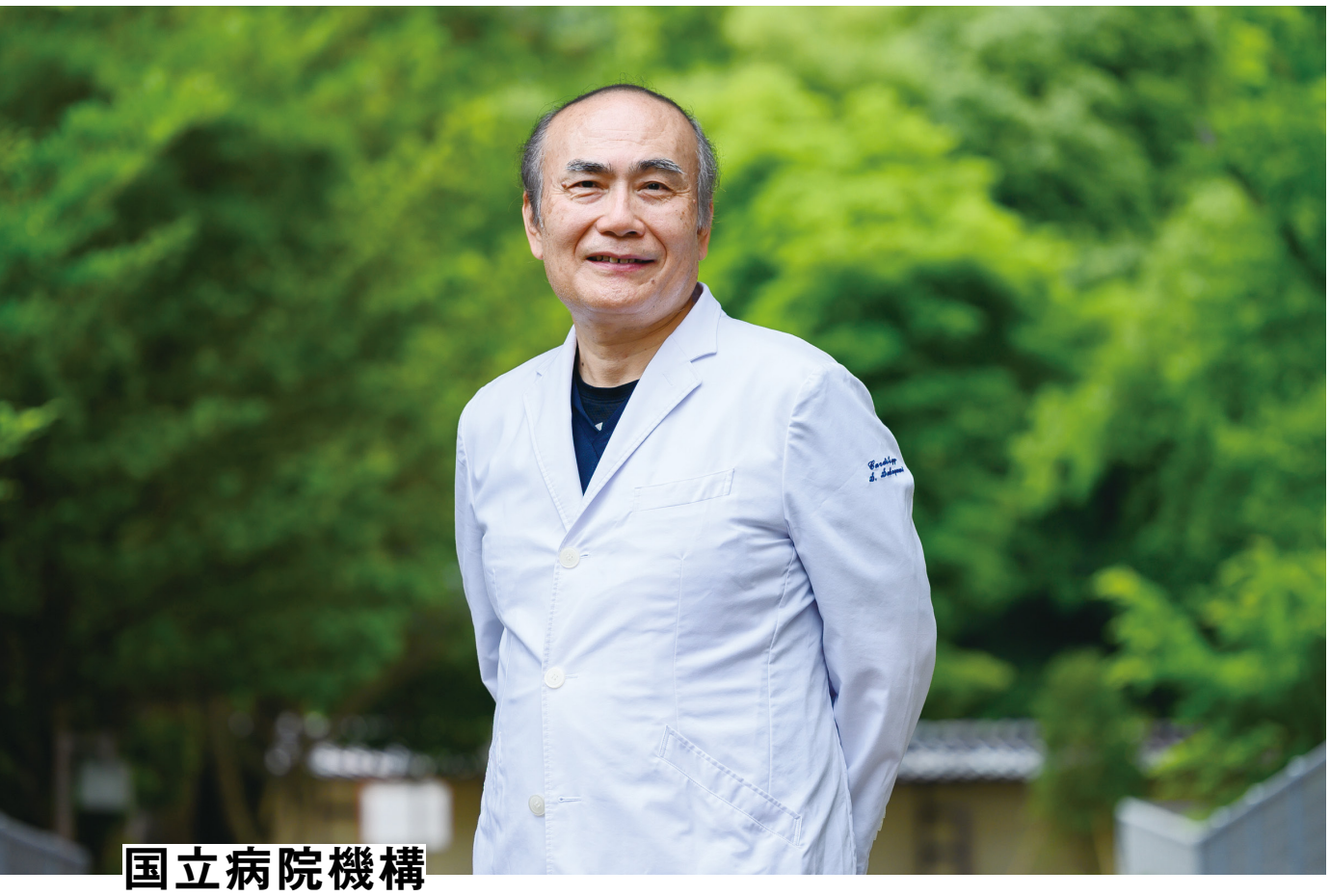
『令和6年能登半島地震』における災害医療対策本部の活動等について

NHOは災害医療に貢献することも重要な使命の一つです。金沢医療センターでは2024年1月1日（16時10分）に発生した『令和6年能登半島地震』にスタッフ一丸となって対応し、また、NHOとしてもDMAT・DPATによる医療活動や医療班の継続的な派遣により被災地の医療を支えてきました。自らも石川県の災害医療コーディネーターとして医療救護活動の統括・調整を担うなど、県の災害医療を支えた金沢医療センターの阪上 学院長に、能登半島地震における活動内容や経験から得た学び、今後の課題などについて話を伺いました。



国立病院機構

金沢医療センター

院長 **阪上　学**

平時からの訓練・準備と“顔の見える”連携が重要 経験を活かし、災害医療により強い体制を

迅速でスムーズな初動対応

能登半島地震による金沢医療センターの被害としては、医局や各部屋の図書、パソコンなどの落下、一部の窓ガラス破損、天井の剥がれ、敷地境界の石垣の崩落、エレベーター停止（これにより入院患者の夕食を人力で7階病棟まで運ぶ）などが確認されましたが、幸い院内患者さんへの被害はありませんでした。

私は地震発生から約30分後に病院に到着しましたが、既に当院のDMAT隊員が集まっており出動準備を始めていました。石川県内の各病院のDMATチームやDMATを管轄する県庁の医療対策課は＜LINEグループ＞でつながっており、地震発生後、直ぐにDMAT本部設置や派遣などの連絡・情報共有が行われ、地震当日の23時には当院のDMAT隊員たちが被害の大きい「公立能登総合病院」に向けて出発しています。

また、DMAT出動準備と並行して、当直の事務をはじめ駆けつけたスタッフたちによって「災害対策本部」が直ちに講堂に設置されました。その後、院内の被害状況の確認（報告の他、確認漏れがないよう臨床研究部長による病院内の見回り確認を実施）、指揮命令系統の確立、広域災害・救急医療情報システム（EMIS）への入力、NHO本部への連絡、スマートフォンアプリ〈SafetyLink〉によるスタッフの安否確認、災害拠点病院として当院の傘下（医療区）にある各医療機関の被災状況の確認を実施しました。

院内に大きな混乱はなく、スタッフたちは非常に落ち着いて対応をしていたのが印象的でした。

災害医療に強いNHOの実力

患者受入れ対応については、地震発生の翌日以降の数日間は骨折や頭部の怪我といった外傷系患者が多く、さらに被害の大きかった能登地域の透析患者さんや入院継続が難しい患者さん、高齢者施設などの入所者、金沢市の1.5次避難所／2次避難所における急病人などの受入れを行いました。（※1.5次避難所とはホテルなどの2次避難所に入るまで一時的に被災者を受け入れる施設で、高齢者、障害者、乳幼児などを優先。金沢市では県内最初の1.5次避難所を1月8日に開設）

当院では震災被害による患者急増に備えるため、病棟再編により未稼働だった「休眠病棟」の活用を決めましたが、対応する看護師などの人手不足が大きな課題でした。そこで、1月5日にNHO東海北陸グループの理事である名古屋医療センターの長谷川 好規院長（当時）に応援要請をお願いしたところ快く動いてくださり、3連休明けの9日から一部運用を開始し、10日からは全国のNHOからの派遣応援（医師1名：看護師16名が交代しながら担当）によって42床の臨時病床を稼働させることができました。

迅速な派遣応援がなければ医療提供体制を維持することは難しかったでしょう。応援スタッフのみなさんの災害医療に対する熱い思いは当院のスタッフたちの大きな刺激となり、モチベーションアップにもつながりました。また、NHO本部やグループとのやり取りのなかで励ましや温かい言葉をいただいたことも私たちにとって大きな精神的支柱となりました。

NHOでは当院へのスタッフ派遣だけではなく、医療班による避難所支援（1月5日から活動開始。穴水町や七尾市などの避難所支援や、1月7日からは甚大な被害のあった輪島市の避難所支援の中心的な役割担う）も行っています。NHOは被災地医療への貢献も大きな使命であり、DMAT・DPATによる医療活動や災害医療班の研修にも力を注ぐなど、全国140病院のネットワークを活用した災害支援を、いつでも迅速に展開できる体制を整えていることが強みです。

当院でも災害訓練を毎年実施しており、訓練の度に課題発見と改善を繰り返してきた成果と経験の積み重ねが、今回の能登半島地震におけるスタッフたちの迅速でスムーズな対応につながったのだと感じています。能登町の松波避難所では、正月休みで帰省していた当院の看護師も避難しており、避難所の準備や運営を取り仕切るなどリーダーシップを発揮しながら怪我人への対応も行いました。これも災害訓練による成果の表れだと思いますし、そうしたスタッフがいることに大きな誇りを感じました。

能登半島地震から見えた課題

当院における災害時の「BCP」（Business Continuity Plan：事業継続計画）では、2次医療圏内である金沢市やその周辺で地震が起きた際の自主登院基準が震度6弱以上（能登半島地震において金沢市は震度5強であり自主登院基準に当てはまらない）であり、今回のように2次医療圏外の近隣地域で自主登院基準を超える大震災があった場合の判断基準は設定されていません。そうした基準も明確にし、さらに安否確認のためのアプリ〈SafetyLink〉を上手く活用しながら適切な登院指示を行う必要があると感じました。また、帰省していたスタッフが電波圏外であったり、スマートフォンが津波に流されたことで、一部のスタッフの安否確認に遅延が生じるなど、〈SafetyLink〉を効率よく運用していくことも課題です。

さらに当院だけでは解決できない課題もあります。交通状況の悪化によって、患者受け入れ依頼があっても搬送が遅れ、前回の透析から4日経っていた患者さんが0時過ぎに到着したこともありました。搬送する自衛隊の車がパンクしたり、ヘリコプターによる搬送も悪天候時には運用できないなど、患者搬送が上手くいかない事態も多々発生しました。

また、災害救助法の適用基準や保険診療との併用の線引きが不明確であり、避難所では出来ない医療があったり、判断に迷う場面があるなど法制度の課題もあります。私自身、金沢市の1.5次避難所の初期運営に携わりましたが、厚生労働大臣とのやり取りによってなんとか避難所における医療体制を整えることができました。災害医療はスピード感が非常に大切であり、臨機応変に対応できる仕組みづくりや法整備が必要であると感じました。

その他、災害時には断水や貯水タンクの破損など水問題も生じるため、貯水タンクの強化や井戸水の有効活用も必要でしょう。

そして、今回の災害医療対応において非常に実感したのは、“支援の力”がどれだけ大きな助けになったかということです。各医療機関の「BCP」には受援体制づくりも反映させるべきですし、災害時に効果的な支援をスムーズに受けられるよう、自院の情報や被害状況を積極的に発信することも重要だと思っています。

大切なのは訓練と連携強化

災害医療は、特に全国から支援に入っていただける医療チームと地域の医療リソース（大学病院や各医療機関、医師会、保健所など）をどう繋ぐかが非常に大切な視点となります。私自身は、1月2日から災害医療コーディネーターとして約1か月間、県庁に詰めていました。コロナ禍の際にも約2か月間、県庁の新型コロナ医療調整本部に医療コーディネーターとして携わり、医療機関、施設、行政との架け橋を担うなど“顔の見える”関係を構築してきました。また、当院においても普段から地域の医療機関、施設、行政と緊密な連携を図っていたため、今回の災害医療対応でもハブ機能としての役割をスムーズに遂行することができたのだと思います。

今回の経験によって、災害時には、平時における緊密な連携、そして訓練や準備が極めて重要であることを改めて実感しました。当院では地域の医療リソースとのさらなる連携強化（特に急性期医療機関と慢性期医療機関、および福祉施設）を図り、DX化も推進していきたいと考えています。また、災害時には災害支援者も大きな惨事ストレスを受けるため「災害対応者は休むことも大切である」ことや、DMAT（本部）が高齢者施設の人を取りこぼしなく救うことにも注力し、さらに早期復興を実現するため、いかに現地でサポートをするか（全てを避難させてしまえば再建が難しくなるため）といった、その先の生活を見据えた支援活動の展開など、学ぶこともたくさんありました。

能登半島地震で得られた課題や学びをしっかり活かし、院内体制の見直し、次回の災害訓練への反映、さらに自治体や各医療機関への提言、意見交換、協力によって、より災害医療に強く、いつ何時でも安全で最良の医療を提供できる体制づくりを構築していきたいと思います。

PROFILE

出身地：福井県
出身大学：金沢大学（1986年卒）
宝物：家族
座右の銘：一隅を照らす

国立病院機構
金沢医療センター

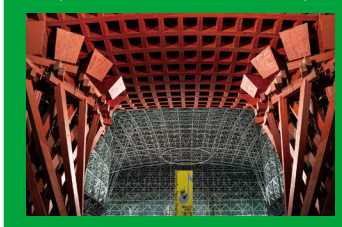
住所 〒920-8650
石川県金沢市下石引町 1-1
WEB https://kanazawa.hosp.go.jp

病床数 **554**床　診療科数 **22**科

［診療科目］

内科、精神科、脳神経内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、呼吸器外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、歯科口腔外科、麻酔科、緩和ケア内科

金沢医療センターのある街



金沢市は本州に位置する石川県の県庁所在地であり、歴史と文化が息づく都市です。江戸時代の風情が色濃く残る地区が点在し、美術館や伝統工芸でその名を知られています。市内には17世紀に造営が始まった兼六園があり、池や噴水などを取り入れた古典的な庭園は訪れる人々を魅了します。隣接する金沢城は、一向一揆の拠点であった浄土真宗の「尾山御坊」が攻め落とされた後、1580年代に本格的な建城が行われました。

金沢市は、約46万人の人口を擁し、北陸地方の中心都市として発展してきました。金沢21世紀美術館や伝統工芸の一端を担う加賀友禅など、多彩な文化・芸術が息づくこの街は、観光地としても人気があります。